

玉川大学グローバルCOE特別シンポジウム

# 「ギャンブル、経済、脳科学」

人間はなぜリスクを伴う行動を選ぶのか？

各パネリスト講演 第1回

作家・評論家

高橋源一郎

文部科学省が選ぶ国際的に卓越した研究拠点「グローバルCOEプログラム」に二〇〇八年度、玉川大学が採択されました。脳科学研究所を核に、坂上雅道教授を拠点リーダーとして進められる研究テーマは「社会に生きる心の創成」。脳科学からのアプローチのみならず学際的に人の心を理解しようとする玉川大学グローバルCOEが、関連分野の研究者を招いて二〇〇九年九月に行った特別シンポジウムの各パネリスト講演を三回にわたってお届けします。

## ギャンブルは時間軸を超越する

人間は主観的に判断して、自分にとって得になること  
価値のあることを選んで行動すると考えられています。

しかし、そうした行動原則とは異なる選択をすることがまあり、  
そのひとつがギャンブルという行為です。

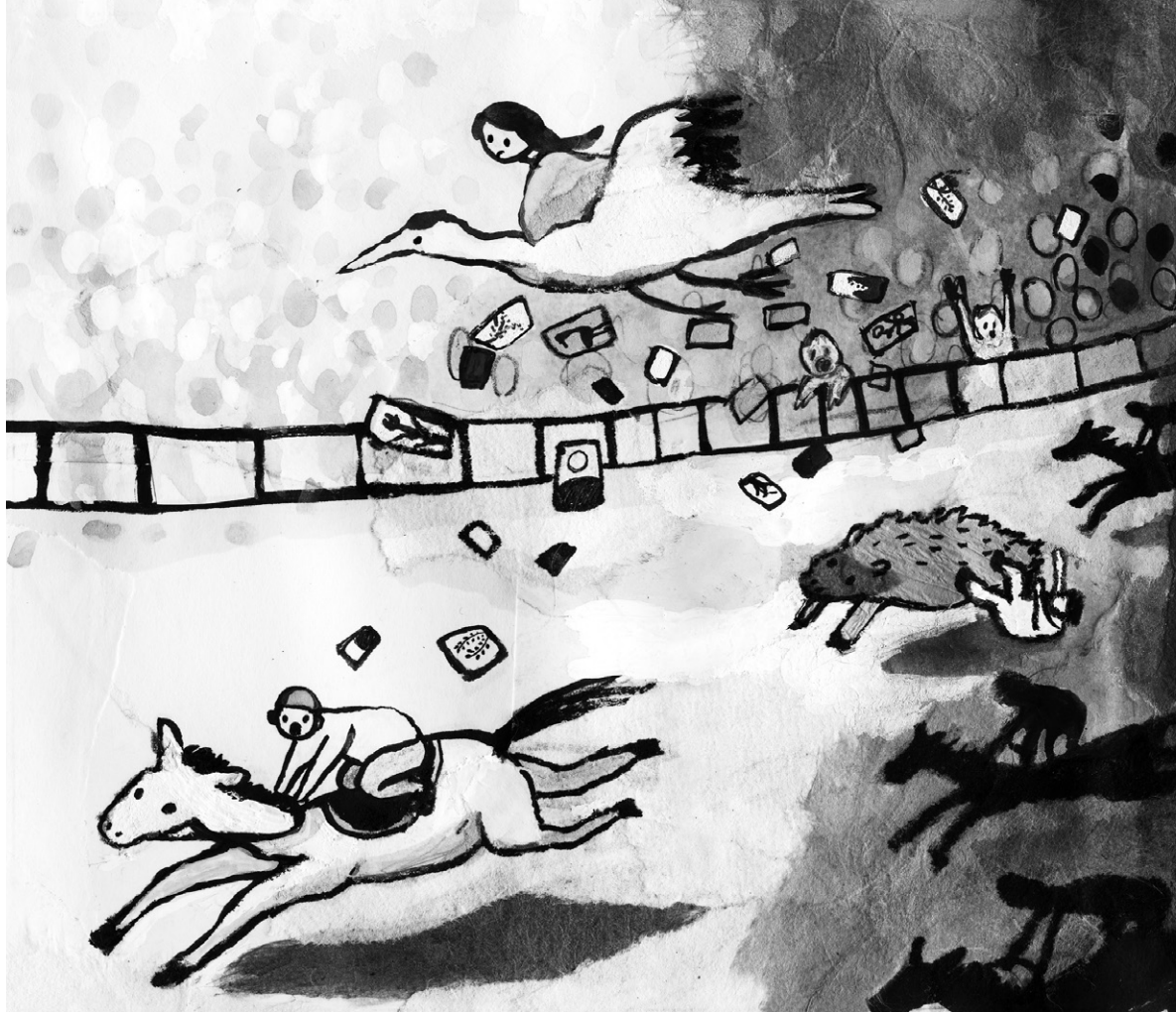
損をすると分かっているのに、ギャンブラーたちが  
敢えてリスクを伴う行動を選んでしまうのはなぜなのか？

ギャンブルをなかなかやめられないのはどうしてなのか？  
「ギャンブル、経済、脳科学」をテーマに行われた

特別シンポジウム講演抄録の第1回は、

競馬評論家としても活躍中の作家・高橋源一郎氏が

ギャンブルに依存する人間の思考について分析しました。



たかはし・げんいちろう  
作家／評論家／明治学院大学国際学部教授。1951年生まれ。『さようなら、ギャングたち』（第4回群像新人賞長編小説賞優秀賞。講談社文芸文庫）で文壇デビュー。『優雅で感傷的な日本野球』（第1回三島由紀夫賞、河出文庫）、『日本文学盛衰記』（第13回伊藤整文学賞、講談社文庫）ほか著書多数。生粋のギャンブラーとしても有名で、三島由紀夫賞を受賞した際の賞金100万円を、翌週の日本ダービーに全額つぎこんで大負けしたことは、今も文壇の語り草となっている。競馬好きが高じて、1988年にスタートしたサンケイスポーツの予想コラム「こんなにはずれちゃダメかしら」は20年を経た現在も長期連載中。

僕がギャンブルを始めたのは三歳のとき。

正月に家族で花札を楽しむのが恒例行事だったんです。六歳のときに、お年玉をおばあちゃんに全額巻き上げられたのが最初の「負け」と考えると、かれこれ五〇年以上は負け続けている計算になりますね。

うちの奥さんは「損をすると分かっているのに、なぜやめられないの？」と呆れたように言います。確かにギャンブルはたまに勝つことはあっても、トータルすると必ず負けるようにできています。それが分かっているやめられないのは、損得だけでは説明できない不思議な魅力がギャンブルにあるからです。

今日はギャンブルに依存する人間の思考プロセスを、まずは僕が競馬にのめり込んだきっかけからお話していきましょう。

今までの僕の競馬人生の中で最も記憶に残っているのは、二八歳のときに体験したレース。当時の僕は、その日暮らしの肉体労働者

をやってしまうのがギャンブルの恐ろしさです。その日は二月の寒い時期で気温は零下。

でも人間ってものは本当に迫いつめられると感覚がおかしくなるんです。寒さも暑さもまったく感じないし、競馬場のざわめきすらも聞こえなくなっていた。

で、いざレースが始まったわけですが、僕が選んだ馬だけゲートの出が悪く、二秒も遅れて出走。……それを知った瞬間、今度はいきなり目が見えなくなりました。何が起ったのか？ そう、体中から汗が吹き出してメガネが曇ってしまったんです。大量の汗があごを伝ってポタポタと足下に落ちていた。競馬で身体に変調をきたした最初の経験です。

しかし、その馬は恐ろしく速かった。コーナを過ぎて直線にさしかかったあたりから一頭ずつぐんぐん抜いていき、ついにあと一頭抜きされればトップというところまで来た。しかし結果は頭差二着でゴール。借りた一〇

で、極貧のどん底にありました。月の稼ぎは一〇万円足らず。アパートの家賃一万円と別

れた奥さんに子どもの養育費三万円を払うと、生活していくのがやつとの状態でした。

やがて家賃も養育費も払えないほどに迫い込まれ、サラ金から一〇万円を借りました。

金は借りて出かけた先は大井競馬場です。狙いは最終レースの単勝。買うつもりだった馬が勝てば、一〇万円が二〇万円になるはずでした。しかし、競馬新聞を眺めているうち、一レース目に出馬する一番人気の馬がなぜか気になってきた。オッズは一・二倍で一〇万円買っても一二万円にしかならないけど、絶対に勝てるはずだと直感したんです。

はたと気付くと僕は一レース目に全額をつぎ込んで、ゴールの前に立っていました。一カ月の給料分全額、それもサラ金で借りた金を、オッズだけで選んだよく分からない馬に賭けるなんて正気の沙汰じゃない。でもそれ

\*1 必ず負ける。

競馬の場合でいうと、馬券の売り上げのうちの二五％が国の控除金となり、残りの七五％を馬券購入者で分配することになるため、トータルすると負けて当然ということになる。海外のカジノの場合の控除金は二〜三％だが、永遠に勝ち続けることはありえない。

\*2 三島由紀夫賞

一九八八年に創設された新潮社主催の文学賞。高橋源一郎氏は「優雅で感傷的な日本野球」で第一回三島由紀夫賞を受賞。授賞式で雑誌「フォーカス」の記者に賞金の使い途を聞かれ、「来週のダービーに全額つぎ込みます」と断言したのって全く同じで、源一郎氏は後には引けない状況に追い込まれることになった。



五川大学グローバルCOE特別シンポジウム

## \*3 学生運動

横浜国立大学時代、高橋氏は学生運動に加わり、凶器準備集罪で逮捕・起訴され、東京拘置所に約半年間拘留された。当時はストライキで授業がほとんど行われず、活動家として街頭デモなどに参加する日々を送っていたとか。

## \*4 ロアルド・ダール

イギリスの南ウェルズ出身の作家・脚本家。風刺やユーモアの効いた短編が得意で、「南から来た男」「味」「大人しい凶器」などは日本でも高く評価されている。スタジオリの宮崎駿氏も彼の大作で、映画『紅の豚』の中にも彼の小説のエピソードがオマージュとして挿入されている。

## \*5 サラブレッド

一八世紀初頭のイギリスで、競馬に勝つことだけを目的に品種改良を行った末に誕生した産駒。現在も交配と淘汰が繰り返されていて、人類が作り出した最高の芸術品とも呼ばれている。一七九一年以降、厳格な血統登録が行われるようになり、原則として両親がサラブレッドでなければ子もサラブレッドとしては認められない。

万円は一瞬にしてパア。その後どうやって帰ったのかはまったく憶えていません。

普通なら肩を落として、「もう二度と競馬なんてやるもんか」と悔やむところですが、そのときに湧き上がったのは、「こんなに怖くて面白いものは絶対にない！」という喜びにも似た不思議な感情でした。

もうひとつ、一九八八年の日本ダービー。

この年に僕は三島由紀夫賞という文学賞をいただいたんです。賞金は一〇〇万円。翌週がダービーで、単勝に全部賭けました。

忘れもしないメジロアルダン。オッズが一〇・六倍の馬です。ゴール前二〇メートルでメジロアルダン一位。当たっちゃうよ、どうしよう。一〇〇万円が一、〇六〇万円。心臓止まりそうですが、頭では計算しています。

ところが、大デッドヒートで写真判定は鼻先の差二着。一〇〇万円は溶けてなくなりました。

高額を賭けるといけませんね。レースが始まった途端に視野狭窄呼吸停止状態。今もこうやって生きているのは謎というほかないです。

## 報酬が目的ではなく、ギャンブルという行為自体の中に価値が存在している

こんな話をしていると「負けたら学習して二度とやらないのが真つ当な人間だろう」と皆さんに諭されそうですが、ギャンブラーってのは学習しない。脳科学では人間は主観的な判断をして自分に価値のあるものを選ぶと

されていますが、僕らは何度痛目に遭っても絶対にそうはならないんです。

なぜ負けると分かっているのに敢えてリスクを選んでしまうのでしょうか？ 儲かったときの喜びが忘れられないからとも言われますが、報酬だけが目的でもないんです。

僕は若い頃に学生運動で逮捕されたことがあります。留置所の中は退屈で、同室の窃盗犯の二人と「ギャンブルでもやろうか」という話になった。とは言ってもトランプもサイコロもありません。新聞を細かく切り裂いて、それぞれ一枚ずつサツと取る。一番大きな数字が載っている紙を引いたヤツが勝ちと。

賭けるのは翌日の朝飯です。美味い飯が出るわけじゃないし、たいして腹が減ってるわけでもないですよ。それなのに僕らはこの他愛もないゲームにどっぷりハマって、夜どおし明け方までやり続けたのです。

ロアルド・ダールという短編の名手も、老紳士と若者の賭博の場面を描いています。老紳士が負ければ最高級車、若者が負ければ指を失う。若者の手は縛られ、肉切り包丁まで準備されている描写は鬼気迫るものですが、彼らの賭け方は「ライターが一〇回、連続して着火するかどうか」。めちゃくちゃハイリスク・ハイリターンな賭けを、とんでもなく些細な内容でやってしまう。

どうもギャンブルの中には、報酬うんぬんという概念では説明できないもつと高次の

## ギャンブルは、宗教や文学や恋愛と同じ文脈の中にあって、損得を基本とした経済活動とはまったく別ものと考えたい。



いでしよう。

神になりたがった人間が、人間界でそれやるのは不可能だから、馬の世界を使って神になろうとしたのが競馬の起源でもあるわけで、ギャンブルという欲望の中には、人間の力が及ばないものに対する抵抗のようなものが潜んでいる気もしてきます。

本来はどの馬が勝つか負けるかなんて、誰にも分かるはずがない。どの血統の馬を掛け合わせれば速い馬が生まれるかなんてことも、データはあっても予測通りにいくはずはないんです。でもギャンブラーたちは、予測不可能なはずの未来を、何とか見ようとして根拠のないものに賭ける。賭け続ける。

一般的な経済原則からすれば、理屈に合わない行為です。でもじつは人間は理屈に合わない行為を他でも多くやっているんですよ。

たとえばイエス・キリストは、人類すべての罪を一人で背負ってゴルゴダの丘に登りました。冷静に考えると意味不明の行動です。よく分からない人が、「私はみんなのために死にますよ」と言って勝手に死んだ。誰に頼

まれたわけでもないし、「私がリスクを冒す代わりにみんな宗教に入ってください」ということでもない。ものすごく一方的な自己犠牲しかそこには存在しないわけです。

でも、キリストの行為を知った人たちは「リスクに合わないおかしいことをやるには、おそらく何らかの意味があるのだろう」と、そこに価値を見出すことになった。本来の経済原則で言うならば「ギブアンドテイク」がすべての基本にあるべきなのに、キリストの行動にはそれが無い。だからこそ地上の論理では理解しがたい「何か」を感じて、人の心の中に宗教が入ってきたんです。

## この依存への感応は、地上の論理で考えると辻褄が合わない

地上の論理とは、簡単に言うと経済の論理です。今日の一、〇〇〇円より明日の二、〇〇〇円。しかし、損得で回っていく経済論理とはまったく別の、もうひとつの論理が、人間の中に存在する。人間の脳には一般の経済論理とは別の論理にリンクする部位があって、

「何か」があるように僕には思えてならないんです。人間はギャンブルで何らかの報酬を得ようとしているのではなく、ギャンブルという行為自体に価値を見出しているとも言ったらいいのでしょうか。

おそらく僕を含めて多くのギャンブラーたちは、本当は負けたがっているんじゃないかと思います。人生での「負け」というのは曖昧なものです。人生の成功や失敗なんてものは、個人の物差しでしか計れませんか。でも、ギャンブルははっきりとした形で「負け」が体験できる。誰の目から見ても負けは負けなんです。どうやってうまく負けるか。そこに何か惹かれる秘密が隠されている気がしますね。

## 知ることが不可能な未来を手に入れるためならリスクは厭わない

ギャンブルの中でも競馬には、とくに深いものがあります。もともと競馬はイギリスの貴族の間で生まれた遊びです。このゲームには条件があつて「血統が明確になっている馬、すなわちサラブレッド以外は出走できない」という決まりになっています。サラブレッドを作るには、人間によって、いい馬同士を掛け合わせる操作がどうしても必要になってくる。つまり、人間がサラブレッドという種族にとって「神」の立場になって、その未来を決定しようとするのが競馬の本質と言ってい

宗教や文学、恋愛などは、その部分が司っているのではないのでしょうか。ギャンブルも、宗教や恋愛に感応するのと、きつと同じ脳の部位が関与しているんじゃないかと想像してしまふんです。

だからこそ、ギャンブルは宗教や恋愛と同じく、報酬だけを求めないし、一度ハマるとなかなか抜け出せないんです。宗教やギャンブルに依存する人の思考プロセスは、地上の論理でしか物事を考えない人にとってはとても理解できないはずですよ。

しかし、キリストの自己犠牲が民衆の心を捉えたように、ギャンブルも、最終的にはちゃんと辻褄や収支が合うようにできている。ギャンブラーたちは大量の金銭や時間、感情、それにもっと様々なものをこの世界で無駄に失いますが、地上で失った分をじつはどこかの場所に、別の形でしっかり蓄えているのではないのでしょうか。

今まで僕が賭けて使った大金も天上界のどこかにプールされていて、別の形で還元される日が必ず来る……そう願いたいですね。

\*7 ゴルゴダの丘  
ユダの裏切りを受けたイエス・キリストが、十字架に磔にされたと言われる場所。キリスト自身は罪を犯したわけではないが、私たち人間すべての身代わりとして、罪の清算のために死を選んだと伝えられている。

\*6 一般的な経済原則  
自分にとって儲かる、得する行動は起こすが、損になる行動やリスクの高すぎる行動は避けるというのが一般的な経済原則。トータルするとマイナスになる可能性がきわめて高いギャンブルは、この原則には当てはまらない。ましてや根拠のないものに賭けるといふのは理屈では説明できない行為と言っている。